

12月9日「やさしい養蜂、新しい技術、拡がる可能性」をテーマに、銀座紙バルブ会館にてミツバチフォーラムを開催した。当日は、NPO銀座ミツバチプロジェクト主催の「森、里、街、そして海をつなぐサステイナブルネットワークフェスタ ファーム・エイド銀座2018」の開催日で、屋上ミツバチ見学会や銀座まち活動報告と各地ミツバチプロジェクト事例報告もあり、多くのミツバチファンが銀座に集まった。

ミツバチフォーラム第一部では「フローハイブの魅力と活用方法」について、3名のニホンミツバチ飼育事例報告を中心に意見交換を実施した。オーストラリアで開発されたフローハイブ（本誌12月号で紹介）は、防護服の着用や煙を炊く必要がなく巣箱を開けずに蜂蜜が収穫できる新技術であるが、実はこの技術、オーストラリアには生息していない野生種のニホンミツバチにも応用可能である。

JRA畜産振興事業の助成を受けてフローサイズのフローハイブを利用した飼育試験を実施した。発表者の一人、野口浩章さん（奈良県）は、ニホンミツバチ重箱式巣箱の上に4枚フローハイブをのせて飼育した。内径21cmの重箱式巣箱とフローハイブ4枚の巣箱はサイズがほぼ同じである。ニホンミツバチは巣箱の上部に蜂蜜を溜めて、下部で産卵し育児を行う性質がある。この性質を応用した野口さん

ミツバチ目線で緑の街を②



フローハイブで採蜜に成功 銀座フォーラムで事例報告

NPO法人銀座ミツバチプロジェクト 最高顧問 高安和夫

は、複数の巣箱で採蜜に成功し合計で30kg以上の蜂蜜を収穫した。

また、宮崎寛さん（熊本県）は、一度に全ての蜂蜜を収穫すると逃去してしまう性質のニホンミツバチだが、フローハイブは1枚ずつ収穫でき

ることから、むしろ1枚は収穫して空の状態にしておいた方が、ミツバチのやる気を刺激し常に蜜を集めに行き、その結果、収蜜量も増えると言う。養蜂を所管する農林水産省畜産振興課の赤松課長補佐からも、フローハイブ技術の普及に期待したいというコメントをいただいた。

第2部では「農福連携養蜂の可能性」について、障がい者就労支援施設での取組を紹介した動画「ビューティフルビークーパー」上映後、取材に協力いただいた各地の皆様がパネリストとして登壇いただき、養蜂技術の習得、経営や収益性、そして今後の展望をテーマに意見交換した。

沖縄県南城市の楽ワーク福祉作業所では、昨年8月講習会参加をきっかけに、施設長の玉城達也さんと重度の障害を持つB型利用者の方々がチームとなり養蜂をはじめ、苦労したそうだが地元養蜂家・新垣さんの協力で養蜂技術を徐々に習得

めた。最初は思いがけない分封等もあり、苦労したそうだが地元養蜂家・新垣さんの協力で養蜂技術を徐々に習得

事業紹介

NPO法人銀座ミツバチプロジェクトは、2006年3月から銀座のビルの屋上でミツバチ飼育を開始。ホテル、レストラン、百貨店など銀座の老舗と連携したハチミツ商品づくりや屋上緑化、地域の生産者との交流事業を通して街の活性化に貢献。

平成22年6月環境大臣表彰。
平成24年4月農林水産大臣より「食と地位の『絆』づくり」選定を受ける。

し翌春には採蜜できるまでになった。その後、パッションフルーツやバナナなどを蜜源にした熱帯果樹蜂蜜を収穫し南城市地域物産館で販売したところ、地元の名産品として認められ「南城セレクション2018」推奨品に選定された。

障がい者就労支援に詳しい炭谷茂さん（済生会理事長）からは、養蜂には障害の程度に応じた色々な働き方があり、収穫した蜂蜜も菓子づくりなど付加価値のある加工が可能である。また、地域の皆さんとの絆作りや環境保護にもつながり、今後、障がい者が働く場として期待したいというコメントをいただいた。



巣箱の前に勢ぞろいしたフォーラム登壇者の皆さん